

## 優秀賞

高校生部門〈自然災害〉

福島県立福島高等学校2年

高野 真有

## 「生きぬく力」とは

「はいよ」と言いながら、コンビニの高齢の女性店員が、箱を床の上にドンツと置いた。水のペットボトルが入った重い箱を、腰を曲げながら店の奥から運び出してくれたのだ。母をはじめ、周囲にいた大人達は一齐に手を伸ばしペットボトルを掴み取った。が、全員が一本しか手にしなかった。これは、あの東日本大震災の約三時間後、母と私が食料調達のために近隣の食料品店を何軒も巡り、やっと水一本を確保した時の出来事だ。

福島市内は津波の被害はなかったものの、水道・電気・ガスのライフラインは完全に停止した。誰もが喉から手が出るほど必要とし、本心では箱ごともっていきたいであろう水を、誰も二本以上は取らなかった。私はボトル水一本でどこまで持つのか不安だった。しかし、あの時はコンビニ店員や母をはじめ誰もが、共助の精神のもとに、物を分け合い、困難な状況を乗り越え、生き抜こうとする意志が自然に働いたのだと、今の私には理解できる。

とはいえ、水がない状況は予想以上に大変であった。風呂、トイレ、料理。どれをとっても水がなければ私達の生活は立ち行かない。父は最良の行動をとろうとひたすら考え、母は工夫や代用で不便を乗り越えた。私の記憶に強烈に残っているのは、水が無いからと母が米をほとんど砥がず炊いたご飯だ。通常であれば白いはずのご飯は、薄茶色で固く、ほんのりと糠の臭いもした。口の中で咀嚼するには少し辛いものであったが、水のありがたさと、水が無ければ砥がなくてもいいという母の思い切りのよさを感じながら飲み下した。

あの大震災を通し学んだことは、共助の精神と冷静に考え対処し、工夫することだ。人は窮地にあると、普段とは異なる思考力、判断力が体の中から湧き上ってくると知った。生きぬく力とは人それぞれに備わっているこの力だろう。自分が経験したことを決して忘れず、自分にもこの力が潜んでいると信じて、自分の人生を踏みしめ歩んでいきたい。